

自己探究を目指した心理職同士の語り合い

“心もとなさ”を出発点として

中島由宇・依田尚也¹・廣木 彩²・野中恵³・櫻井未央⁴

A dialogical practice between clinical psychologists aimed at self-inquiry
Starting from *kokoromotonasa*: a sense of psychological uncertainty

NAKASHIMA Yu, YODA Naoya, HIROKI Aya, NONAKA Megu
and SAKURAI Mio

Abstract

In this study, we tried a new practice of dialog in which psychologists talk to each other and engage in self-reflection on the subject of *kokoromotonasa*: a sense of psychological uncertainty. Based on this practice, the study explored and elucidated the participants' experiences of conversation between them. Results revealed that each participant has their unique sense of uncertainty and that they could mutually acknowledge each other's existence and individuality as the existence of the "I" who feels uncertainty has been ensured, prompting a circular psychological response. The analysis suggested that this practice of dialog significantly promoted self-exploration among psychologists.

1. 問題と目的

心理支援などの対人支援において、被支援者の内的世界の理解しがたさや言葉の重さに揺さぶられて、どのように在ったらよいかと惑うことや、被支援者の抱える困難や取り巻く理不尽な事態に圧倒されて、どう支援したらよいかと無力さを感じることはしばしばある。そうした不確実性や脆弱性は支援者にとって受けとめがたく、時に専門家としての立ち位置を揺さぶられる。しかし、そうした不確実性や脆弱性を、人が生きることの本質の反映であり対人支援における不可避な側面として捉え、性急に排除しようとするのではなくそれを抱えることに実践的意義があるとする指摘も見られる。これまで、ビオンによる「ネガティブ・ケイパビリティ」

(Mawson, 2018/2023), 「ゆらぎ」(尾崎, 1999), 「不確実性に耐える」(本山・永野・村山, 2023) などといった概念や表現を通して、臨床心理学や社会福祉学の領域で検討が重ねられて

きた。

筆者らは、実践の場で立ち現れる、不安で落ち着かず、もどかしいような頼りないような所在ない心の感じを“心もとなさ”と名づけ、支援者や被支援者のそうした主観的状态、支援の場におけるそうした間主観的状态に着目することの実践的な意味を探索してきた(中島・櫻井, 2025)⁵。特に、支援者が、直視しがたい自身の“心もとなさ”を敢えてみつめ、不確実な世界に生きる者として誰にでも存在する脆弱性を棚上げせずに「わがこと」として引き受け、省察することは、被支援者とより対等に、率直な「私」として被支援者の前に在るために重要なことであると考えた。また、直視しがたい“心もとなさ”を捉えるには、その営みを抱えるサポーター的な仲間との関係性が助けとなるのではないかと考えた。さらに、“心もとなさ”をみつめようとする自分を仲間に支えられる体験が心理職のエンパワメントにもつながりうると推察した。そこで、心理支援を実践する心理職同士が、自らの“心もとなさ”を出発点として、互いに支え合いながら自己探究を目指す対話実践を試行し、その実践が何をもたらすのか検討しようと考えた。

心理職同士の対話実践としてはエンカウンター・グループやTグループなどがかねてから知られている。いずれもベーシックな形式としては非構成的であり、いわば“心もとなさ”状況を設定して、自由な対話における「今ここ」での体験を通して、自己理解や自己受容、自尊感情の増加などをを目指すものである(永野・河崎・益田・荒木・宮川, 2022; 石倉・中田, 2021)。しかし、今日の公認心理師養成は、理論や知識、技法などの習得を目指すトレーニングに偏りがちであり、心理職の自己探究を目指すこうした対話実践は十分に組み込まれているとはいいがたく、心理職が自身を省察し「私の臨床」を作り上げていくような「セラピスト・センタード・トレーニング」のための実践の開発がさらに必要であるとする主張(白井, 2022)も見られる。白井(2022)は、心理職の自己探究をはかる対話実践の目的を、(a)臨床観・臨床基盤(軸)の再確認、(b)心理職の生育歴と人生観の振り返り、(c)心理職としてのクセや強み、スタイルやタイプの確認、(d)自分の臨床に対するエンパワメント、に細分化し、目的を焦点化した半構成的な対話実践の例を整理している。そして、(a)、(b)、(d)にまたがる実践例として、心理職を目指した動機や価値観、展望といったテーマについて語り合う「セラピストの基盤を振り返ってエンパワメントされるワーク」を提示している。本研究は、こうした心理職の基盤の省察をはかる半構成的な対話実践のひとつに位置づけられる。“心もとなさ”という、人や世界の不確実性、脆弱性を示す、心揺さぶられる根源的なテーマを中心にすえることによって、対話と省察のドラスティックな展開と、人と人としてのつながりによるエンパワメントを企図する。

本研究では、“心もとなさ”を主題に心理職同士で語り合い自らを省察する、新たな対話実践を試行し、対話実践に参加した心理職である研究者自身に何が起きているのか、研究者各自が自己分析し、対話実践における体験の構造を探索的に明らかにすることを目指す。それにより、心理職の自己探究を促進する心理職養成のありかたについても示唆を得ようとする。

2. 方法

1. 研究者（「語り合い」の参加者）

本研究では、研究者が対話実践の参加者となり、その経験を自己分析した（以下、文脈に応じ「研究者」ないし「参加者」とする）。研究者は、臨床経験が数年から20年程度の心理職4名（中島・廣木・野中・依田）であった。心理職としての勤務経験を有し現在は大学教員をしている2名、大学院に在籍し心理職としても勤務する2名であった。研究を企画した第一筆者が、今回の研究への関心を共有できると考えられる人に依頼した。また、対話の場を安全なものとするために、オブザーバー（櫻井）が1名参加した。それぞれの興味関心、立ち位置は結果と考察にて詳述する。

参加者同士は、関係の濃淡はあるものの知己の関係にあった。オブザーバーは、2名と面識があり、他の2名とは初対面であった。4名とも共通の指導者から大学院で臨床指導を受けた経験があった。

2. 「語り合い」の方法

(1) 対話実践の方法

対話実践の方法として「語り合い」法（大倉，2002）を参照することとした。「語り合い」法とは、研究者が前提とする枠組みに沿って構成された構造化された聞き取りではなく、一対一での語り合いを通じて特定の事象に対する両者の主観的経験を示し、その語り合いを研究者がどのように体験したかも記述していく方法である。「語り合い」で目指されるのは、「静的な『聞き手 - 話し手』関係に基づく、言葉の『一般的客観的意味』の分析だというよりは、むしろ聞き手と話し手が相互に入れ替わりながら両者の『主観』がぶつかり合うことで生まれてくる、固有の関係性に基づいた言葉の『私的意味』の分析」（大倉，2002，p.90）である。個別的な「私」が、自由に話してもよいという固有の場・関係性に基づいて、自分なりの手応えのある言葉で語りを深めていく方法であるといえ、本研究の目的と合致する。

大倉の「語り合い」法は、研究者と研究協力者の二者での語り合いを想定し、分析するのは研究者側であるが、本研究においては、「語り合い」参加者それぞれが研究者となり、自らを分析の対象とした。相互に関わりながら個別に「私」が省察する本研究の方法は、当事者研究の方法である「自分自身で、共に」（浦河べてるの家，2005，p.5）と近似性がある。ここに立ち現れるのは、私的な“心もとなさ”という「個別性」と、主観と主観の混交がおきながら場を共有するという「共同性」である。自分だけでは十分に吟味できていなかった事象や体験の意味を、参加者同士での「語り合い」の経験によって了解しようとするのが本研究の「語り合い」である。

(2) 手続き

① 「語り合い」の方法の検討と事前準備

まず参加者同士が文献を持ち寄り、「語り合い」の方法についてアイデアを出しあった。また、

事前に、各自が関連書籍（中島・櫻井，2025）も参照しながら，“心もとなさ”というキーワードから喚起，連想される，心理臨床での経験にまつわるエピソードをあらかじめ準備した。各自のやりやすい方法で準備し，資料などの準備は必須とせず，準備した話題に縛られずにその場で思いついたことを優先してもよいこととした。

②「語り合い」の実施

参加者4名とオブザーバー1名で行った。参加者3名の母校である大学の一室を使用し，約2時間45分を要した。ビデオカメラによる録画，ICレコーダによる録音を同時に行った。場が安全に機能するために，できるだけ対等な関係性を意識し，語りの順番も決めず，その場の流れに合わせて進行させた。また，一人ひとりの語りをじっくり聴きあうために，各自のターンを大切に，言い淀んだり言葉に詰まったりしたときも，相手の言葉を待った。その場で生まれ出る語りを大切にして，それぞれの理解や理解できなさを投げかけあいながら，自他の理解を深めていこうとする姿勢を意識した。

3. データ分析方法

(1) レコーディングデータの共有

レコーディングデータ（音声・動画）を共有し，各自が見直し（聞き直し），その場で感じていたが言語化できなかった点，振り返って感じられてきた点などを検討し，必要に応じてメールで共有し，議論した。

(2) 各自のメタ観察

レコーディングデータから研究者各自が印象に残った言葉や対話の流れを抽出し，メタ観察（鯨岡，2005）を行った。メタ観察とは，抽出された言葉や流れを「図」として切り出すことになった研究者の興味関心との関連を示し，それが直接示す意味を超えた「メタ意味」を把握するために行う省察を指す。特に，(a)私（参加者自身）にとっての“心もとなさ”とは何か，(b)「語り合い」の体験が私自身にもたらしたものは何か，という観点を重視した。各自のメタ観察を共有し，感想を交換しあった。

(3) 「語り合い」の体験の構造への考察

各自のメタ観察から，“心もとなさ”や「語り合い」の体験を表す動詞句を抜粋し，ラベルをつけてカテゴリーを生成した。カテゴリー間の関係を図式化し，「語り合い」の体験の構造を検討した。

3. 結果と考察

1. 各参加者によるメタ観察

(1) 何度も困いを取り払いつづける（中島）

私の興味関心や立ち位置：心理臨床において“心もとなさ”を抱えることの価値を若い世代に伝達し共有することはできるのかという関心を抱き，その価値が「絶滅の危機に瀕している」（松本，2025）不安も感じながら「語り合い」に臨んだ。第1著者であるため，自身の発言が

誘導的にならないように意識していた。

やりとりの抜粋とメタ観察：“心もとなさ”の伝達や共有に関して言及し心が動いた 2 か所のやりとりを抜粋し、メタ観察を行った。

【抜粋 1】“心もとなさ”を“心もとなさ”のままにしておく難しさ

中島：松本先生の言葉とか、今日の依田さんの言葉とかを聴くと、そうだよなあってさっきから胸がざわざわするというか（笑う）、（中略）**どんどん不安になっていたんですけど**（笑う）、でもなんか私の中に、**なんか分ち合えないんじゃないかみたいなことがわりと前提としてあるのかもしれないなあ**という気もしていて、なんでこの前提がこんなに前提になっちゃっているんだろう、みたいなことをちょっと思うというか（中略：ある教育現場で）そちらに行くと、なんかもう、すごい伝えられないんですよ、こういう大事だと思うこと、“心もとなさ”という言葉そのものでないにしても、ああでもないこうでもないみたいなものの価値、とか、（中略）ここではそういう使える言葉を、なんか、なんか伝えるにくなっちゃう？伝える前にこちらがすごく、それこそ私もビビりなので（笑う）、あ、ビビっちゃうというか、**伝わらないだろうなってこっちで頭の中で自己完結しちゃうようなところがあるって**、伝えようと思っても早口になっちゃったりとか（笑う）、ちょっと資料読んでくださいみたいになっちゃったりとか（笑う、一緒に笑う人もいる）、**いろいろなんかぶざまなことをしてるなあって思っていて**、まあ、まあ、そうすりゃ、そうだよ、伝わらないよね、というふうにも思うんですけど。うん、問題なのは、私の中で、きっとこれって今どきじゃないから伝わらないだろう（少し笑う）、みたいなのが、けっこう肥大化しちゃってるというか、うーん。で、……わかんないんですよ、実際が。だからさっきの野中さんはどうやってその、心もとなさになにか、前提にできるものをどう学んできたんですかねというふうにおうかがいしたのはひとえに私がそれを知りたかったからで（**一息に言っって息をついで**）、うん、だから、わからないんですけどね、すごく怖い、怖い感じがするというか、うん、何を怖がってるのかなと思うんですけど。

【メタ観察 1】“心もとなさ”の価値を若い世代と分ち合えるのかという「胸がざわざわする」不安、なぜ分ち合えないという前提が私の内に存在するのかという問いとそこにある「怖さ」を言語化した。

「語り合い」の中盤の発言であった。それぞれの語りを聴いて似たような心配や問題意識をもっていることがわかり、嬉しさや気安さが生じていた。そして、ある教育現場で“心もとなさ”の「価値」を伝える前に「伝わらないだろうなってこっちで頭の中で自己完結」してしまう自分について語った。このとき、他の参加者にきっとわかってもらえるという予感から、どこか内輪的な近しさを感じていた。笑いながら話す自分の中に、その現場を外において批判し、さらに笑いに交えて揶揄するような心の動きを感じて、「なんだか嫌だな」というざらりとした不快感と自己嫌悪を覚えた。それによって焦りが生じて、いったん外に投げ出した問題を再び自分のほうにたぐりよせようと、「ぶざまなことをしてるなあ」と自己批判したのかもしれない。そして、伝わらないだろうという予感を「肥大化」してしまっ、予感を確信的な決めつけに

変えてしまっていること、そこには「怖さ」があるという省察に向かった。この発言の最中も、年少の野中さんに聞きたいと思いつつも問う怖さを感じている。焦るように一息に述べているのはその怖さゆえであるのかもしれない。

なぜ伝えられないのか。自分にとって切実に大切な“心もとない”思いを誰かに差し出して、もし無視や非難をされたらいたたまれなくなってしまうであろうと、私は強くおびえ怖がっている。この仮想的な「誰か」は、“心もとなさ”の価値を認めていない者として、私の中で自動的に想定されている。そして私は、“心もとなさ”はどうせ伝わらないと自己完結しておさめてしまう。そうしているうちは、“心もとない”私の思いは、他者とのあいだで確定することなく、恐れを貼り付けたまま私の心の中にモヤモヤとくすぶりつつける。

“心もとなさ”をめぐる対話は、ダブル・コンティンジェンシーとしてイメージされる。コンティンジェンシーとは、「随伴性」とも「偶有性」とも訳されるように、「完全なる偶然と完全なる必然の間にあるようなもの」(遠藤, 2015, p.261)であり、コントロールしがたい「因縁(縁)」であって、「時間と不確実性」を組み込んだ「未来に開かれた概念」である(サトウ・渡邊, 2011, p.57)。ダブル・コンティンジェンシーとは、そうした「別様でありうること」が二重に重なっている状態であって、「ふたつのブラックボックスがあり、お互いにかかわっているが、相手が何を想定しているのかわからないという状態」を指す(三井, 2023, p.37)。対話に先立って、私には、相手の心やそこにある“心もとなさ”が見えない。私の“心もとなさ”を差し出し、相手に否定されれば、それは私固有のものとの関係性において確定し、“心もとなさ”は私に貼り付いた属性として確かなものになってしまう。“心もとなさ”は、ブラックボックス同士のやりとりの初手として出すのはとても怖いカードなのであり、あらわしてよい場であるという確証が得られない限りはあらわにしがたいものである。

内輪的感覚はなぜ生じたのか。心もとない思いを、恐れを乗り越えていったん外に出すと、場の空気に触れたとたんにながらりと変質して、価値が確定されてそこで固まるような感触があった。私の笑いは、“心もとない”思いを話す恥ずかしさのあらわれであるのと同時に、希少な価値を共有していることを確かめようとするような、「わかるよね？」と誘うような内輪の確認のようでもある。“心もとなさ”には不安がつきまるとして、そのままにしておくことが難しく、内輪集団で取り囲むようにしてその価値を固めておきたくなるのかもしれない。内輪とは、「わかっている者同士」の集まりであって、内輪になったとたん、わからなさの探究の動きはせき止められることとなる。

【抜粋2】 線を引きたくなる自分にあらがう力

櫻井：(実習に関する学生の言葉) **雑談して終わったんですけどあれ意味ありますか**(笑う) **みたいなこと**言ってきて(中略)「雑談」って言葉でくられちゃうことだと思ってるんだなあっていうのを、なんか全然教えられてないし、(中略)そこで心通わせてくることってこの学生にとって、な、どういうふうに教えてあげられるんだろうかっていうのが(少し笑う)、なんだか、難しいですね。

中島：そうそうそうそう、さっきの本のところでも思ったこととなんか今の話がつながったんですけど、そうそう、でも、雑談で終えてあれでいいんですかねーの学生さんもそういう心もとなさはあるんだろうなあと思うんですよ、そのなんか、ペロって言うけど。これ、なんか、専門職養成で行ってるのに（笑う）なんかおしゃべりして終わってきちゃったっていうのは、なんかやっぱりその学生さんの心もとなさなのかなって思うと（中略）じゃあそこに、（ねえ）どう、なんか、そこでこう、**「若者は」って線を引きたくなるのは私が自分で線を引いちゃってるんだと思うんですけど、うーん……。**

櫻井：そう、地続きなんですよ、それで私たちも（ねえ）、そうなんですよ（中略）結局は同じですよ、自分の。

中島：私たちだって現代社会を生きているから。

櫻井：そうそうそう（中略）同じなんですけどね、地続きだけど、なんだろう、このなんか、うまく伝えられなさはみたいな。

【メタ観察2】 伝わらないということを前提にしてしまう心の動きがリアルタイムに生じた。

「語り合い」の終盤に、心理職としての姿勢を教える難しさの話題となり、実習に関する学生の言葉に心がざわついた。「雑談」とくくられてしまうことへの落胆や怒りを感じ、「意味」を問われてそれを確かに言葉にできるかとたじろぐ自分を感じた。私にとって理解しがたい「若者」に思わず線を引きたくなる、線を引いてそのわからなさを「若者」のほうに転嫁したくなる心の動きが生じた。

その後、その学生がどのような世界を体験しているのかと考えが及んだ。実習でどのように振舞ったらよいかわからない、自分のしてきたことはあれでよかったのだろうかという困惑から生まれた問いであったのかもしれないと、その学生の中にも存在するであろう“心もとなさ”がおぼろげに見えてくるように感じた。「地続き」であり無関係ではないからこそ、学生の言葉に私の心はざわつくのだろう。「現在社会を生きている」その学生も私も、“心もとなさ”の耐えがたさを携えている。この耐えがたさの共感から、その学生と何か話せないだろうかという思いが芽生えた。

一連の私の心の動きを整理すると、学生の言葉によるざわつき→線引きしたくなる→ぐっと抗い、共感の方向へ→学生の中の“心もとなさ”の想像へ心に向けていこうとする、という流れであり、線引きしそうな自分を踏みとどまり、理解しようとする方向へギアチェンジするような力がここで生じている。この力のかけ方が、“心もとなさ”の分かち合いのために重要であると感じる。

総括①私にとって“心もとなさ”とは：フヤフヤと頼りなく、そのままにしておきにくい感じとして捉えられた。フヤフヤとしたそれを心の内から外に出すには勇気がいる。対話に先立って、私には、相手の心がわからず、相手の“心もとなさ”が見えない。それを差し出し、相手に受けとめられなければ、それは私に貼り付いたネガティブな属性として確かなものになってしまう。その恐れによって、どうせ伝わらないだろうと自己完結的に自分の中にとどめてし

まいやすい。また、他者に伝えにくいと感じたときには、自分を守るために相手を“心もとなさ”の価値を理解しない者として捉え、相手と自分の境目に囲いをつくってしまいやすい。フヤフヤとした感じはよりどころなく、ひとたびそれを出して、受け入れられた感触を得ると硬化して、途端に内輪的な囲い込みの動きが引き起こされる。

“心もとなさ”は誰の心の中にもあるはずなのに、それを抱える人（たち）とそうでない人（たち）がいるかのように、線引きして囲い込んでしまいやすい自分の傾向があることに気づき、私はそうした囲いをつくることに抗いつづけたのだと考えた。“心もとなさ”を抱えることは「心ある者」として生きているということであり、囲いをつくることに抗いつづけるとはすなわち、世の中に「心ある者」とそうでない者がいるわけでは決してなく、すべての人を「心ある者」として捉えつづけるということである。

総括②「語り合い」の体験が私にもたらしたものは：その場に素直にいられる感じがして、リアルタイムで心の動きをつぶさに感じ取りやすかった。だからこそ、心安いくつろぎの感じと、その危うさと、同時に細やかに感受することができ、囲い込みの傾向を認識することができた。

(2) わかっていない私を大事にすること（廣木）

私の興味関心や立ち位置：私は福祉と教育領域で勤務経験を持つ心理職で、大学院で障害者福祉施設の生活支援員への聴き取りを基にした研究を行う立場である。臨床と研究両面で“心もとなさ”を感じる場面は多く、2023年に第1著者らが主催した同テーマでのシンポジウムで報告を担当したことから、考える機会は増えた。今回の「語り合い」に向けても前向きに、自分の中の“心もとなさ”を探り準備していたが、うまく整理できないまま当日を迎えた。

やりとりの抜粋とメタ観察：以下、「語り合い」の中で印象に残った場面のやりとりを抜粋し、メタ観察を行った。

【抜粋1】私がほしいと思っている「中間の言葉」

野中：（中略）なんかこうお母さんのこう揺れ動くこう生々しい気持ちをそのまま伝えられるわけではなくて。なんかすごいこう簡潔にまとめなきゃと思って、ものすごいこう記号化したなんか、すごいこう簡素化したことしか伝えてなくて。（中略：他参加者の応答）

廣木：（中略）私、その生々しい気持ちがその記号的な言葉になってっちゃう状況っていうのは、なんか、ああ、なんかそういう現場で、なんかそういうこうジレンマっていうか、あるなっていうのを感じて。（中略）なんかその、記号化された言葉……な、なんか、私もすごくそう、難しいなと思うんですけど、その中間……ではないんですけど、生々し……さを記号にはなりきれないけど表す言葉みたいなものってなんか、どっかで出て、出てくるのかなとか、そういう言葉がなんか欲しいなとか、私自身が（笑う）思ったり、あの、しながら聞いてました。

【メタ観察1】他職種との共有場面での「生々しい」ものを「記号化した」ものとして伝えることについて、自らの経験や思いが喚起された。

この時、私は「記号化した」という言葉の中に、これまで勤めてきた中で出会った、障害特

性を表す言葉を思い浮かべている。当時会議や研修に参加すると飛び交っていたそれらの言葉は、私にとって、現場で感じている「生々しさ」とどこか乖離した「記号化」された印象を与えるものであった。そのため私は次第に「生々しさ」を共有できる仲間内と、記号化された用語を用いる必要のある『外』の感覚を持つようになった。私が述べた「中間」の言葉とは、仲間内でのみでなく、外でも通用する言葉がほしいといった、自らの思いが喚起されたものであった。

【抜粋2】 『わかっている』象徴としての「心理士さん」

廣木：(中略)「(その心理士さんに) 教えてもらってすごく助かるんです」みたいな話をされて。で、どういうことをって言ったら、やっぱその、自閉症のこだわりっていうのはこういうことから来てるんだと。だからこうなんだって言って、その人がへえって、こう思ったって話をインタビューでこう、してくださって。あ、心理士ってそういう、やっぱイメージなんだって心理士である私が(笑う)。

【メタ観察2】その後、私は自分のターンで、研究において「部外者」のように感じる居心地の悪さが、「わかってない」と意識することと関係していることを感じていった。

私が応答を受けて「心理士さん」のエピソードを話し出した時、自身の研究でのインタビュー場面での複雑な思いが同時に思い出された。協力者から語られた「心理士さん」は、私とは違う役割の人であると、そこでは共有されていた。では、ここにいる、心もとない私はいったい誰だろう、というその時の感覚がありありと生じ、私は自嘲気味に話している。このエピソードの「心理士さん」は、私とは違って支援者の方たちに受け入れられ、役に立っている「心理士さん」であり、「わかってない」自分に対して、『わかっている』象徴のような存在である。私の自嘲は、その「心理士さん」への羨ましさ、「わかってない」居心地の悪さを感じながらその場にいる自分に対する恨めしさであった。ここには、私が自らを卑下する形で「心理士さん」と対比させ笑いを取ることで、本来私にとって必要である研究の意味・意義を語ることから逃れている構図も窺われる。

【抜粋3】 急に沸き起こった当時の憤り

依田：心もとなさをスパッと解消してくれる人っていうことですかね、心理職。(中略)
廣木：今、思い出して。10年くらい前くらいに、研修に私行った時の、(中略)一事が万事そういう感じで、そのこういう場合はこう、こういう場合はこうっていうふうに感じて、もう、愕然としたことを今すごく思い出して。

【メタ観察3】10年前の感情がむくむくと沸き起こった私は、わかってももらえるだろうという思いだけで仲間内に話すようにして話し出した。

【抜粋2】の語りに対する応答の言葉から生じた感覚であった。具体的に覚えている内容がないにもかかわらず話し出した私に生じていた高揚の源は、当時の憤りや傷つきに似た感情で

あった。私が当時当該研修で受け取ったメッセージは、心や関係性といった曖昧な捉えどころのないものへの否定と脳科学的なエビデンスの過度な強調であった。私は「愕然とした」思いが自分の中に急に立ち上がってきたことで、「スパッと解消」=『わかる』といった言説に反発する自分を感じた。【抜粋 2】で『わかっている』『心理士さん』への羨ましさを意識したことへのカウンターのようなものである。そして、私の「生々しい」感情が、言葉にならないそのままを私に語らしめたそのありようは、過去の私が仲間内に話すありようと同じであった。

【抜粋 4】 言語化の失敗

中島：スパッとした答えがあったら満足みたいな感じなんですかね。そうなんですかね。

(中略)

廣木：(中略) 私多分心もとなさを抱えた時に、その、SV を受けに行って解消しようとするなって思うんですけど、私の場合は先生のあれも、あれもあると思うんですけど、多分その、なんか断片的にはモヤッとこうあるけど、手応えみたいなのを、もうちょっとこう、もうちょっと確かめたいとか、この人像をはっきりさせたいみたいな、なんか、うん。なんかそういう、あ、なんの話でした (笑う)

【メタ観察 4】 【抜粋 3】で生じた高揚から問いが自ずと自分に向き、その勢いで前のめり気味に話し出したところで、言語化に失敗した。

この失敗は、私の腹に生じた高揚感の「生々しさ」の勢いに乗って、拙速に言語化しようとしたことに拠っている。自分自身ともその場の参加者とも対話が必要であったこの場面で、モノロギ的な語りとなっている。

この直後、休憩となり時間が空いたことや語り合いが続いたことで、ここまでの自分のありようが対象化された。そのありようとは、“心もとなさ”から発したモヤモヤしたものが対話の中で揺さぶられ、私の中に感情が湧き起こり、「生々しさ」そのまま話し出したその過程に、確固としてある私の存在を感じることにすると同時に、対話のない拙速なモノロギは「中間」の言葉とはならないことを痛感した、というものであった。

総括①私にとって“心もとなさ”とは：「語り合い」での私の中の一連の心の動きには、これまで私が随所で経験してきた言葉にならなさが現れていた。言葉にならないままで共有されているような感覚に私は安住しつつ、一方では言葉にならない自分への不満も持っていたことが「中間」の言葉がほしいという言葉にうかがわれた。

西平 (2017, p.4-6) は、フロムの「持つこと (to have)」（知識やテクニックを学ぶこと）モードと、「あること (to be)」（知識やテクニックに頼ることなく無心になって患者と向き合うこと）モードに触れてケアについて論じている。フロム (1976/1977, p.123) によれば、「持つことが関係するのは物であり、物は固定していて記述することができる。それに対して、あることが関係するのは経験であって、人間の経験は原則として記述できない」ものである。すなわち、「持つ」モードは明確に定義できるのに対して、「ある」モードは定義が困難である。

「語り合い」を通じて体験されるものが、「ある」ことに関するものであると考えれば、“心もとなさ”の明確な記述や言語化の難しさは自然であると思われる。しかし、私の【抜粋4】の失敗に照らせば、言葉になりにくいからこそ、モノローグ的に吐露して終わるのではなく、何度も反芻し、ああでもない、こうでもないとして自己内・外で対話することが、表しにくいそのものに今一步接近する手立てとなりうるのではないか。

上記から、私の“心もとなさ”とは、自分がしていること、大事にしているものの価値を、私自身が言葉にしえていなかったことから生じていた感覚であると考察される。私は『わからない』自分や相手を大事にしたいと思っていた。それは、刺激されて腹底に確固として感じられた自分が示していた。しかし、私は『わかっている』言説に対して、「わかっている」自分の価値下げをすることで、反芻と言語化の作業をごまかしていたことに気づくことになった。その気づきは、揺り動かされた感情に基づいて「ある」モードを言葉にしようとする自らの動きを感じたこと、その感覚を振り返り反芻することで生じた。そして、その自らの動きからは、自己内・外での対話の必要性と可能性が考察された。

総括②「語り合い」の体験が私にもたらしたものは：「語り合い」直後は私自身のモヤモヤは解消せず、どういう体験だったのか掴みかねた。その後のたっぷりとした省察の時間は、上記で示した「語り合い」時の気持ちの動きを認識し、自分の中でぼんやりしていたものを捉まえて位置付けようとする時間であった。この過程を経ることで、私にとってこの体験が、言葉にすることの必要性を感じ、また励まされる体験となったことがわかった。励まされるとは、「語り合い」でそれぞれの参加者がみな、言葉にすることを、考え考え、その身に響かせて、丁寧に行っていることから得られたものであった。

國分（2021, P.115）は、対談の中で「人を説得する手段として言葉が使われず、『エビデンス』のみが使われていく」実態があると述べ、対談者である千葉が「言葉で納得するということと、エビデンスで納得するということとは違うこと」であると応じている。私はこの「語り合い」の中で、参加者からの多くの「納得」できる言葉に出会い、揺り動かされ、喚起され、私もまた自分の言葉を考えようとした。それは「エビデンス」に基づくものではなくとも、発したその人の身から湧き出たような迫力があり、だからこそ私の身に迫る。そのような言葉と出会ったとき、その言葉は私の身体に響き、波紋のように私の中に動きを生じさせた。しかし、身体で会得するようなその感覚を自己内・外の対話を抜きにしてそのままにしまうと、私がほしいと思っていた「中間」の言葉にはつながらないことを今回の「語り合い」で感じるようになった。言葉へのなり難さはありつつも、言葉にしようとしながら場を共にすることで、自分の中の作業もゆっくりと続いていき、私にとっての「納得」を探そうとする作業も続いていくことを体験する機会となった。

(3) 問いつづけることと心もとなさ（野中）

私の興味関心や立ち位置：“心もとなさ”を含め心の中で生じる感覚を丁寧に見つめながら臨床を行う先生方の視点に以前から感銘を受けていた。私は周産期の病院に非常勤心理職として勤務し、臨床心理士・公認心理師としては3年目を迎えた。「語り合い」に臨むことへ恐れ多さ

を感じていたが、先生方の温かなまなざしを受け、安心感を得ながら参加することができた。
やりとりの抜粋とメタ観察：「語り合い」において，“心もとなさ”への視点が私自身の中で特に開けていくように感じた3カ所のやりとりを抜粋し、メタ観察を行った。

【抜粋1】「忙しい」と心もとなさ

依田：本来であれば、誰であれ心もとなさっていうのは持っているはず、なのに、それを専門性、としないと、意識しないと、絶ち切れてしまう。(中略) 声を挙げられない、方、たちの声を、専門家が、代弁して、その人たちの権利、やニーズを主張するっていうアドボカシーがあると思うんですけども。……まあおそらく、心理職に、より一層求められてくるものなのかなと、思っています。“忙しい”という中で、ますます“心もとなさ”というものの価値が下がって表明されにくくなっている、という中で、その中でもなんとか、辛うじて“心もとなさ”を大事にしている専門家としてクライアントに会って、その声を拾い上げて、社会の中で訴えていくという。

【メタ観察1】「語り合い」の冒頭、心理職に限らず他職種も「忙しい」現状があることを前提に、「忙しい」と心もとなさの両立の難しさが共有されると共に、その上で心理職として心もとなさとどう向き合うかについて語り合われた。「忙しい」ことを口実の一つとして、自身の中で湧き立つ心もとなさに蓋をしつづけるのではなく、むしろ「忙しい」場だからこそ、心のどこかで“心もとなさ”への関心を閉ざさずに居ることは、心理職として大切なことなのだと改めて強く感じた瞬間だった。ただ、大切だと確かに感じたこの時の私自身の感覚の中身は、つかもうとするとすり抜け、目を凝らそうとするとぼやけてしまい、まだ言葉に落とし込むことができずにいる。

【抜粋2】「小さいこと」への自覚

中島：やっぱりわかることは限られているし、できることって本当に、本当になんか、なんだろう……これくらいのことではない？ 医療だったら、本当にその時点で出会って、出産前、後の、人生の中でもものすごい激動の一時期、限られた期間を共に過ごすっていうことで、すごく意味があるけど、でも、なんだろう、そこでこう、なしうること？とか、そこで、えっとそのお母さんの思い、どれだけわかるかっていうことでいったら、やっぱりわからないこと、ばかりだなみたいなの。謙虚さっていったら、その辺の位置づけも謙虚さみたいなのですかね。だからといって、でも開き直るのとも違うけど……(中略)……野中さんが仰った、“じゃあ私がそこに立っていいんだろうか”……と……まあ今も思いますけど、でも、でもそれでもやっていくみたいになるのは、なんかその辺が、いかに小さいかみたいな、あ、これは私の場合ですね、だんだん私の場合の話になっちゃったけど、もう本当に小さいんだっていうのが、さすがにわかってきたっていうか……

櫻井：そういう小さいって、何が小さいっていう感じですか？

中島：お母さんのことを？……お母さんのことで、何かわかるように感じるってことか？わかる

こととか？……なにかその関わりによってできること？のみたいな、ことの小ささみたいなところですかね……

野中：……（言葉が出ず）

【メタ観察2】「語り合い」の前半、私は周産期の病院にて、自身の”心もとなさ”に耐えきれず、患者の語りを受け止めることができなかつたと感じたケースについて語った。これに対して、”心もとなさ”を抱くかどうかはまた別として、そもそも心理職がクライアントとの関わりの中でなしうることに対する認識の持ち様について示唆を得た部分である。

産科を中心に働く私は、妊娠や出産を機に自身の過去を振り返る過程で、これまで蓋をしてきた思いが揺さぶられ、悲しみや不安を感じている母親に出会うことも少なくない。ただし、病院には通常の心理面接のような枠はなく、せわしない外来や病室でお話をうかがうことが多い。また心理職として、やがて生まれる、もしくは生まれて間もない児が退院後も心身ともに安全な生活を送ることができるようにアセスメントもしなければならない焦りから、母親の思いに私自身が留まれているような、語られた思いをどこか蔑ろにしているような“心もとなさ”を感じることもある。ただ、私が母親に会うことができるのは、妊娠から産後約1ヶ月間、かつ当院への受診が必要とされている限られた期間でしかない。この時間と場の有限さを心に留めておくことは、母親の思いを受け止める外的および内的な枠、ひいてはこちら側の器を意識することそのものであると思う。心理職としてなしうることへの認識に始まり、これらの基本的なことに対する私自身の意識の緩さに気づき、恥を越えて愕然とし、「語り合い」の場では言葉が出なかつたように思う。

また、患者に関するこちらのアセスメントを他職種へ共有する際、相手の仕事の妨げにならないよという思いから、私自身が強く委縮してしまうことがあるが、これはそもそも、共有する意義を私自身が見出すことができている、もしくは見失っているゆえの脆さによるところが大きいと思う。

周産期という場と時間の有限さ、かつ私自身が心理職としてその中でできることは「小さい」ことへ深い自覚を持つこと、また同時に、「小さい」けれども、病院が目指す母児に寄り添ったよりよい医療の提供に寄与できるよう、“心もとなさ”を感じながらも心理職として模索しつづけることが大切であるように感じる。

【抜粋3】「部外者感」と心もとなさ

廣木：**部外者感**っていうか、相手を通して自分の中で感じちゃうんだと思うんですけど。

／櫻井：**部外者だからこそ、語られる、じゃないけど、近づける心があるみたいな、ことってあるんだろうなって思ったり。**（中略）でもそこには、相当なっていうんだろう、……部外者として居なきゃいけない、いつまで経ってもなんか、真ん中には、ど真ん中にはいかないで、いるっていう、スタンスっていうのが……まあなんか、そこを居るんだっていう心づもりがやっぱり、必要なのだからって、なんかその、感じたっていうか。（中略）**その人の心の中で部外者になっていることを私たちが、部外者として拾うみたいな（笑）**ことが、はじめてやっぱり。

その人の心の中でも、こう置いておけない部分、部外者感のものを、こちらが部外者感として、だからこそ、なんか……一緒に拾って考えるっていうのは、いいなと思ったりして。

／中島：(前略) **みんなの中にも部外者的なところが、多かれ少なかれあるのかな……**なんかそこ話していくしかない感じがしますかね…

【メタ観察 3】「語り合い」の後半、「部外者感」という言葉を始点に、心理職の抱く「部外者感」がクライアントの思いを拾う糸口となりうる点、さらに「部外者感」はより多くの人の心の中にも見出せる可能性が言語化された。心理職として、“(医療に対して)何もできない”感覚が、患者の無力感や罪悪感を想像する手立てとなった私自身の体験が、未熟ながら連想的に思い出された。「部外者感」があるゆえに、その場に居ること自体に“心もとなさ”が伴う中でも、自身の感じる感覚を、周囲の人の心の内に潜む「部外者感」を拾う手立てとしながら、その場に飲み込まれずに居つづけることが、心理職としてなせることに繋がっていく道筋を得たように感じた。

総括①私にとっての“心もとなさ”とは：問いつづけることについて神田橋は、「何か世の中に確かなものがないという感覚。そういう感覚はずっとありましたね。それが、知的なものへの耽溺を促すことになったんでしょうね(略)ラディカリズムなんですよ。いったん構築するでしょう。次にそのいちばんもとは何だろうというふうになるんです。そうしないとね、何か確かじゃないんです。それは今もありますね。いちばんものいちばん確かなものは何なんだろうと。頼りなさというのかな、いろいろと設定されていることのはかなさ、移ろいやすさ、崩れるに決まっているという感じというのは、ずっとありますね」と語る(神田橋・滝口, 2003, p. 43)。このことから、「確かなものがないという感覚」が、「いちばん確かなものは何なんだろう」と問う心を作り出していると共に、問いつづけることが、「確かなものがないという感覚」を保障する営みになっているように感じられる。そして「確かなものがないという感覚」は、心もとなさと通じる感覚と捉えることができると考える。

また河合(2000, p.58)は「心理療法の基本は、『そこにいる』ことであって、これができるようになったら、はじめて自分の心理療法は完成したと言えるのだと思っている。それができないから、いつも自分の心理療法家としての資質に疑問を感じてしまうのです」と述べている。そして橋本(2011, p.31)は、周産期における心理職の関わりについて「一見ネガティブに見える要素とそこに同時にある可能性との両方をしっかりと見据えながら、動かずに『待つ』ことに存在をかけるとき、『待つ』ことは優れて能動的な在りようとなる。それは、『聴く』こと、『いる』ことの意味に通じる、心理療法の中核であるかもしれない」と述べている。これらの言葉には「そこにいる」ことや「待つ」ことの意味の深さが示唆されていると共に、そこに至るまで絶えず問いつづけながら心理職として歩まれてきた時間が想像される。

今の私にとっての“心もとなさ”とは、私の至らなさを前提としつつ、心理職として相手の心と向き合うことができているか、という問いを軸に湧き立っている感覚であり、この問いの過程では無力感、やるせなさなど様々な感情が伴ってくる。こうした感情が重い蔦のように絡

みついてくる中でも、“心もとなさ”を抱えておくことの意義を耕していくことによって問いつづけることが私の中で保障され、心理臨床の中核に少しでも手を伸ばしていく糸口となってくれるように感じる。

総括②「語り合い」の体験が私自身にもたらしたものは：「語り合い」の場を通して、日々の臨床の中で蓋をしつつあった“心もとなさ”にようやく留まることができ、まさにこんがらがった糸が少しほぐされると共に、また新たな絡まりに気づくような体験を得たと感じている。「語り合い」の体験で得た「関係性の器」を支えとして、“心もとなさ”を感じる心と向き合いながら、私も心理職として歩んでいきたいと思う。

(4) “心もとなさ”と“心もとなしぐさ”の間で (依田)

私の興味関心や立ち位置：臨床心理士・公認心理師として、その養成にたずさわる大学教員である(4年目)。心理職はいかなるプロセスを経て『自分らしい』心理職になっていくのかというに関心を持ち、研究している(依田, 2024 など)。中島・櫻井(2025)を読み、特に『心もとなさ』を手放さない限り『やはりわかっていないのかもしれない』と『わたし』を開き続けることになるため、精緻な理解に近づき続けることができるのでしょうか(菅沼, 2025, p.166)という部分について、私が臨床実践において大事にしようとしてきた姿勢がピタリと言語化されたように感じた。「語り合い」の最中は、“心もとなさ”への関心の強い心理職同士が集うという『場の安心感』もあってか、私は普段よりもずいぶん饒舌であった。

やりとりの抜粋とメタ観察：「語り合い」において特に印象に残った言葉・やりとりを抜粋してメタ観察を行い、以下の3点について考察した。

①先達(師)が示してくれた“心もとなし”在り方を信仰する私

【抜粋 1-1】 実習の場で院長から投げかけられた言葉

野中：依田先生のご授業(中略)の中でも、やっぱり「わかる」ことが大事なのではなくて、「曖昧さを抱えていく」っていうことがすごく大事なんだっていうのは教えていただいた。(後略)

依田：(前略) 自分が今まで(臨床実践の姿勢として)大事にしていたことっていうのは、“心もとなさ”って言葉に集約されるのかな?っていうふうに思いました。で、自分の姿勢がどこで身についたのかって言うと、(中略)(大学院生時代の実習先である医療機関の院長から)「クライアントの前で、あなたは未熟な人間だ」って言われて。(中略) 心の原体験として、クライアントの前に立つ自分っていうのはあまり未熟である、という“心もとなさ”ってものがあって、それを大事にし続けて今に至っているので。

【抜粋 1-2】 専門書の中で出会った先達の言葉

依田：(前略) 自分の好きな臨床家の先生方の本っていうのは、とにかくなんか「心に対する畏れを持つように」とかってことは、(中略)結構書いてあったと思うんですけども。“畏れを持つ”っていうのが、“心もとなさ”とちょっと近接するところがあるのかなと思って。「わから

ないからこそ畏れる」っていうんですかね。(後略)

中島：(前略) **私が素敵だなんて思う先生もそうだ**なって。

【抜粋 1・3】大学院という場で体感した“心もとなさ”

廣木：(母校のケースカンファレンスについて)ときどき、先生のご意見が違ったりもするじゃないですか。あれもすごくいいなと思って。(中略) **誰か 1 人の意見で一色になっちゃっている、というのではない良さ**っていうのがあったのかもなって。

依田：(前略) **結論をなんか出してスパッとしたって感じじゃなく、教員同士で揉めて終わった、みたい**な。まあ、“心もとなさ”ですね。(中略)ベテランの教員がたくさん集まって一つのケースについて検討しても、余計拡散したりとか、謎が深まったりするもんなんだろうな……、っていう。**そういう文化の中にいたっていうのは、なんか自分の今のスタンスに影響しているんじゃないかな**と思いますね。

【メタ観察 1】心理職としては後進であり、私の授業を受けていた野中さんのお話を受けて、心理職としての私自身の在り方に影響をもたらした先達のことを思い起こした。「クライアントの前で、あなたは未熟な人間だ」という実習先の院長の言葉は、当時の私の心に深く刻み込まれ、「未熟でしかない私ができるのは、せめて一生懸命にお話を聴いて、あれこれ思いを巡らせることぐらいだろう」と思うに至った。同時に、“心もとなさ”ゆえに藁をもつかむ思いで色々な専門書を読んだ。その中で出会ったのが、「畏れを知らず、ただやみくもに心の深層へ突っこんでいくのは、患者には無論のこと、ときには治療者にも大きな犠牲を強いる。したがって、まず浅いところから始めなければならない。自己の力を過信して深みに進むのは控えた方がよい」(成田, 2007, p.32), 「来談者は自分の存在をかけて話す。その相手が、たかだか心理学や社会福祉や医学の知識を学んだことで、人生の深い問いに答えられる人間になったかの如くに錯覚する軽率な面接者であったと知ったとき、来談者が絶望するのは当然である」(熊倉, 2002, p.83)といった先達の言葉であった。“心もとなさ”でいっぱいの、ビビりな私の在り方をいくらか肯定してもらえたように感じ、こういった言葉の数々には本当に救われた。心の中で繰り返し、得られた言葉を咀嚼し、自らの支えとした。それはある種の『信仰』とすら表現できるものであったのだろうと、今回の語り合いを通して思い至った。こうして、私は“心もとなさ”ゆえにクライアントへの精緻な理解を目指し、臨床の手応えを少しずつ得られるようになっていったと思う。

また、私にとって大学院は、ただ1つの正解のないことについて考え続け、謎を残したまま終わっていくことが許容される、「臨床ってそういうものなんだよ」と教えてくれるような『場』であった。これも、上記の“心もとなさ”への『信仰』を深める一因であったかもしれない。

今回の「語り合い」は、私の通っていた大学院(母校)にて実施された。この『場』が、私が抱いていた“心もとなさ”を賦活させて、その懐かしさゆえに普段より饒舌になったのかもしれない。ところで、『懐かしい』とは、「あの頃に戻りたい」という切なさ、と、「良い思い出だったな」という温かさが混ざったような感情であるという(OpenAI, ChatGPT, 2025年12月21日)。これはつまり、私なりに大事に信仰を続けてきた“心もとなさ”の何かが損なわれ、変

わってしまったということだろうか？

② “心もとなさ”と“心もとないしぐさ”の間で揺らぐ私

【抜粋 2-1】 みんな忙殺されている現実への憤り

野中：（勤務先である周産期の病院において）『お母さんには揺らいでいる心があるんだ』って
いうところを、なんとかチームで共有しておくということが大事なのかなって思いつつ。そ
れどころじゃない、助産師さんの忙しさは。（後略）

依田：（前略）そもそも今の社会が忙しすぎるっていうのはやっぱりあるなあと思って。自分が
学生の時よりも格段に、やっぱり公認心理師カリキュラムになって、（中略）忙しい中で、「心
もとなさ”を大事にしよう！」っていうのはなかなか酷な状況だなと思います。（中略）アドボ
カシーってありますよね。その、声を上げられない方たちの声を専門家が代弁して、その人た
ちの権利やニーズを主張するっていう。（中略）心理職により一層これから求められてくるもの
のかなと思ってまして。“忙しい”という中で、ますます“心もとなさ”の価値が下がっ
て表明されにくくなっている中で、なんとか辛うじて“心もとなさ”を大事にしている専門家
としてクライアントに会って、その声を拾い上げて、社会の中で訴えていくという。

【抜粋 2-2】 スパツとしている一部の専門家への憤り

依田：（最近炎上した、心理学関係の本について）キャッチーな、それこそチャート見れば対
応法がわかるみたいなものっていうのは、やっぱりニーズがあるんだろうなと思うんです。う
ん。でも、自分はそういうスタンスではないから、「こんな本、本当にふざけんなよ！」と。で
も、実際は売れているんで、（中略）キャッチーさっていうか、わかりやすさっていうのはすご
い求められているんだろうなと思いますし。（後略）

中島：（しばらくこの話題について語り合った末に）世の中の人は、そんなことにスパツとした
答えがあると思っているんですかね……？スパツとした答えがあつたら満足、みたいな感じ
なんですかね？（依田：うーん……）

【抜粋 2-3】 “心もとないしぐさ”というキラーフレーズ

中島：（指導する学生との関わりについて）例えば授業で、まあ、こうじっくりこう考えていく、
内省していく、ってことは、頭では大事だってわかるけど。でも、（中略）自分の人生の経験で
なんか「おやっ」思って、わかんないな、とかいうことで、対話して、ちょっと相手との関係
が深まったとかいうことはない、っていう。（中略）だから、頭ではなんか、そういうふうに教
わるから、そういう心理療法っていうのは意味があるんだろうなって思うけど、体験としては
わからない。でも大学院に来たら、やたらみんな先生たちが省察せよやらなんやら言うから、
まあ、なんか、こういうところらしいんで、やってみようと思っている。（中略）（教員側が）
“心もとないしぐさ”をさせちゃっている。

【抜粋 2-4】 教員も学生も誰もが“心もとない”

依田：結局忙しいんですよね、教員も（苦笑）。（中略）かつての自分が学生の時は、いま無駄

とされているかもしれないものに時間を使えたと思うので。(中略) 社会からはみ出ている、価値がないってされているものこそ大事なものであるんだけっていう姿勢は、心理士として大事だと思うんですけど。(後略)

櫻井：(前略) 学部生なんですけれども、この前デイケアに行き来て、「なんか雑談して終わったんですけどあれ意味ありますか?」みたいなこと言ってきて、「くそう……!」って思ったんですけども(笑)。学部生だからいいのかな、とも思うんですけども。でもなんか「雑談」って言葉でくくれちゃうことだと思っているんだなあっていうのを。(後略)

中島：(前略) でも、雑談で終えて「あれでいいんですかねー?」の学生さんも、そういう心もとなさはあるんだろうなあと思うんですよ。(中略) 「若者は」って線を引きたくなるのは私が自分で線をひいちゃっているんだと思うんですけど、うーん……。

櫻井：そう、地続きなんですよ。それで私たちも(ねえ)、(中略) 結局は同じですよ。(中略) 地続きだけど、なんだろう、このなんかうまく伝えられなさみたいな感じ。

【メタ観察2】“心もとなさ”について語り合う中で、今の私は懐かしさを抱いた(メタ観察1)。「わからない」ことに留まり続け、「わかった」ような手応えが感じられても「本当にそうなんだろうか?」と疑い、こういった“心もとなさ”の結果としてクライアントに関する仮説を精緻化するには、相応の時間を要するはずである。しかし、今を生きる私は忙しさを感じ、その時間を設けることが難しいように思っている。そして、私以外にもみんな、忙しさでいっぱいに見える。その上で、私にとっての今と、大学院生であった昔とを対比させて、「あの頃は今よりも忙しくなくて、自由で、“心もとなさ”を十分に味わうことができよかったです!」と思ひ、懐かしくなったのだろう。

「語り合い」の場における私は、かつての若者(そこには私も含まれている)と今の若者と地続きである可能性について省察せずに、ひたすら「あの頃は良かった」というニュアンスの話を続けていた。「今」の学生と、「あの頃」の学生を、社会やカリキュラム、システムといった外的なものでスパッと線引きし、理解しようとしていた。そんな、精緻さの欠けた理解によって落ち着こうとする私は、果たして“心もとなさ”を今でも心から信仰していると言えるのだろうか。

そしてさらに、「語り合い」において、私はキャッチーな言葉をスパッと出している(ように見える)一部の専門家への憤りも表明していた。この憤りを安心して吐き出すことができ、「語り合い」の最中やその後はしばらくスッキリした気持ちでいた。しかし、メタ観察を通して、私が精緻さを欠いた、ひどく雑な理解の仕方をしていることを思い知らされた。“心もとなさ”を信仰している私は精緻な物事の理解をできる側として、忙しさによって“心もとなさ”を十分に味わえずにいる(ように見える)「人々(他者)」のことをできない側であると評してしまっているのである。

こうして、中島先生が語り合いの中で発した“心もとなしぐさ”という言葉がキラーフレーズとなって、メタ観察をしている私の根幹を揺さぶったのであった。語り合いの場で私は、ひたすら「最近の忙しい学生は……」を主語にしていながらも、実のところは“心もとなさ”

への『信仰』が『しぐさ』にすぎなくなってしまう私自身のことを嘆き、憤っていたのではないだろうか。そんな中で、語り合いの中での中島先生の『『若者は』って線を引きたくなるのは私』や、櫻井先生の「学生も教員も地続き」といった言葉によって、社会やカリキュラム、システムといった外的なものに対してだけではなく、私自身に目を向け直し、心の内にある“心もとなさ”について省察することを促してもらえたように思う。

③私たちは“心もとなさ”をいかに体現していくのか

【抜粋 3-1】「昔はよかった」で終わりにたくない

依田：自分が院生の時に良かったって思えるものを、今やるにはどうしたらいいのか。「昔は良かった」で終わったら、面倒くさいおじさんで終わっちゃうので。(中略) 過密なカリキュラムの中で、「ああ。よかった」っていう何かを体現しなきゃいけないなと思っているんですけども。どう体現するか……。(後略)

中島：(前略) 私も「昔は良かった」になっちゃうことが、すごく怖くて。かつては忌々しいと思っていた、「昔は良かったんだよ」とか語るようなおばちゃんにはなりたくないなって思ったりして(笑)。

【抜粋 3-2】“心もとなさ”の価値を“心もとなくな”継承する

中島：(語り合い参加者の全員が指導を受けたことのある、とある先生について) 強く私たちの心の中に、なんか全然“心もとなくな”，その“心もとなさ”の価値を伝え、私にとってはですけれども伝え切ってください。それが内在化されて。(中略) この“心もとなさ”っていう、弱々しいこれを、(その先生のように自分は)絶対伝えられないですけど。でも、そこには伝わるだけの力強さは、きっと必要なのかなあ、と。(後略)

櫻井：(その先生は) 心もとなさを自信を持って伝えていましたよね。

【抜粋 3-3】“心もとなさ”部外者であることを臨床に活かす

櫻井：私は廣木さんがおっしゃってくださった「部外者」という言葉、すごくなんかしっくりくる。(中略) 部外者だからこそ語れるじゃないけど、近づけることってあるんだろうなって思っ
て。(中略) その人の心の中で「部外者」になっていることを、私たちが「部外者」として拾うみたいなの。(後略)

中島：(前略) その人たちの心の中にも部外者があるってことですよ。(櫻井：うんうん) すごくそうなんだなと思って。(中略) 心理職は部外者なのかなと。(中略) みんなの中に部外者的なところが多かれ少なかれあるのかなと。なんか、そこを話をしていくしかない感じがしますが。(後略)

依田：(先述の馴染み深い先生が「頭でっかち」な場(大学院でのケース検討など)にて、よく怒りを表明していたという話が展開) そっか、頭でっかちになっている場にとっては、先生は部外者だということですね。(中島：ああ、そうそう)。頭でっかちの場の中から排除されているものがあるわけですよ。(中略) (その場で排除されているものの)象徴として先生が部

外者として現れて、その場をかき乱す(笑)。そういう感じなんですかね。なんかイメージとしては。

櫻井：パワーがあるんですね、部外者なのにね(中島：確かにね)。

【メタ観察 3】「語り合い」の終盤になってやっと私は自分自身の心に目を向け、いくらか精緻に省みようとしていたようである。その結果、私の心に内在化された、面倒くさくて忌々しい「昔は良かったんだよおじさん／お婆さん」が語り合いの場において姿があらわになった。どうしてもなくビビりで“心もとない”私を心の片隅に追いやり、部外者にしようとしているのである。そんな中で、私たちにとって共通の先達であり、『部外者』の象徴たる先生について、「語り合い」の参加者それぞれが思いを巡らせた。私たちそれぞれに内在化された、力強い先達の姿から、なんとか己の中の敵と戦う術を見い出そうとしていたのかもしれない。「語り合い」において、私はこれより前に『アドボカシー』(advocacy)という言葉が発していた。私は、その社会の中で居場所をなかなか見つけられず、いわば部外者のようになってしまっている“心もとない”クライアントに代わって、同じく“心もとなさ”を辛うじて大事にしている心理職が声を発し、支えていくことの必要性を訴えていた。“心もとなさ”を共に抱えているからこそ、そしてそこに価値を置いているからこそ、私たちはなんとか連帯することができるのではないだろうか。

“心もとなさ”を心から信仰していると思いつき、実際のところは精緻さに欠けた理解で物事をわかった気になってしまう、これが“心もとないしぐさ”であると言えよう。忙しくて余裕のない現実を生き抜こうとしている私もまた、どこかに“心もとなさ”を抱えている。だが、現実にはなかなかそれを表明することができず、“心もとないしぐさ”でスッとやりすごそうしてしまう。メタ観察を通して、アドボカシーを必要としているのは、今や崖っぷちに追いやられ部外者のようになってしまった、己の心の中にある“心もとない”私自身なのではないかと省察するに至った。

そんな私は、部外者だけれども、“心もとなさ”の価値を“心もとなく”（力強く）継承しようと努め続けていた『内在化された先達』と、心の内にて語り合う。そして、心の中で部外者になってしまった“心もとない”私の声に耳を傾け、『力強い先達』の力も借りて、アドボカシーを実践する。「心理臨床の世界で、社会で、今ここで、“心もとない”私は確かに生きているのだ！」と、私は“心もとなく”，でもその価値を強く信仰する者として声をあげる。力強い先達の姿を私がいまま真似るのではなく，“心もとなさ”と“心もとないしぐさ”の間を行ったり来たりしながら省察し、臨床を試行錯誤する、不器用でビビりな私の在り方をそのまま体現していく。こうして、目の前にいるクライアントや学生のことを精緻に「わかりたい」と思い続けることができるのではないだろうか。

総括① 私にとっての“心もとなさ”とは：“心もとなさ”は何とも心もとないものである。それはクライアントへの精緻な理解を可能にする、臨床における基本姿勢である。しかし、その価値を心から信じているつもりが、いつの間にか形だけの“心もとないしぐさ”に成り果て

てしまう可能性がある。

私の心の内には、端っこに追いやられた『部外者である心もとない私』や、面倒くさくて忌々しい『昔は良かったんだよおじさん／お婆さんとしての私』、そして心理職としての理想的な在り方を体現する『私にとっての力強い先達（師）』が共存し、相互に影響しながら私の在り方をかたち作っている。心理臨床において欠かせない「精緻な理解」のために、心の内の『部外者である心もとない私』の声に耳をすませ、アドボカシーを実践しなければならない。それはきっと「本当に私はわかっているのだろうか……？」「それって“心もとないしぐさ”だったりして……？」という、何とも小さくて弱々しい声である。『昔は良かったんだよおじさん／お婆さんとしての私』が、精緻さの欠けた紋切り型の理解で済まそうと誘惑してくる。そんなときに、『私にとっての力強い先達（師）』が叱咤激励してくれる。こうして、“心もとなさ”と“心もとないしぐさ”の間で揺れ動く、『等身大の心理職』としてクライアントの前に、もしくは学生の前に立ち続けることを、私自身の今後の目標としたい。

総括② 語り合いの体験が私にもたらしたものは：もし、今回の「語り合い」が「語り合い」だけで終わっていたら、「心もとなさ」について“心もとなくな”語り合うことができた！というように『スッキリ体験』に留まっていたと思う。しかし、『メタ観察』を通しての省察があったからこそ、私の『信仰』が『しぐさ』にすぎなかったのかもしれない、という気づきが得られた。これは苦しかったが、結果的に私自身への精緻な理解が促されたように思う。

私にとって、今回の「語り合い」とメタ観察、そして発表、論文化という一連のプロセスは、『心理職とは何たるか』について深いところまで考え抜き、お互いを刺激し合いながら、自らの専門性について省察することが促される体験になった。研究としてだけでなく、心理職やそれを目指す学生の研修として、あるいは精緻な自己理解を促すグループワークとして、教育実践においても私なりに取り入れていきたい。

2. 総合考察

研究者 4 名によるメタ観察(文字数：37,053 字)から、“心もとなさ”や「語り合い」の体験に関する 215 個の動詞句を抜粋し、ラベルをつけ、6 個のカテゴリーを生成した(表 1)。そのうち、主たる 4 個のカテゴリーを相(phase)として体験の構造を捉え、図示した(図 1)。以下、カテゴリー名を【 】、ラベル等の表現を「」で示し、「語り合い」に参加する体験の構造を検討する。

「語り合い」の出発点とした“心もとなさ”とは、頼りなくそのままにしておきにくいものとして感知され、「この世界には確かなものがないという感覚」(神田橋・滝口, 2003, p.43)につながっていた(【Phase0 不確かな世界で】)。参加者は、その不確かな“心もとなさ”をめぐるエピソードを語り合いながらその「大切」さを共有し、参加者同士の関係性の「器」に「支えられ」、「受けとめられ」、「包み込まれて」、「心もとなさ」は在ってよいと相互承認される感覚を得ていた。その体感と同時に、「私」がそこに存在すること、「居る」ことを肯定される感覚でもあった(【Phase1 在っていい】)。

そうした基盤の上に、参加者の心は、「語り合い」やその後のメタ観察やディスカッションの

中で活発に動いた（【Phase2 動かされる/動こうとする】）。“心もとなさ”という不確かな感覚は、確かなものへの探究を生み、自他の精緻な理解へと向かわせる力をもっていると考えられた。その動きは、思っていたことを「疑ったり」「味わったり」、他者の言葉に「耳をすませたり」、思いを「言葉にしたり」「手応えを求めて」「捉えようとしたり」するなど、自ら（みずから）能動的に動こうとすることによるものと、「想起されたり」、「感じたり」、「気づかされたり」して心が「揺さぶられ」、心の動きが「喚起」（「触発」「賦活」「活性化」）されるような、自ずと（おのずと）中動的に心が動かされることによった。それは、「自分に向かう/向かわせるような」自己省察的な動きであった。

心が活発に動かされ、動こうとする中で、参加者は対他あるいは対自的に対話し、揺らぎながら、問いつづけ考えつづけた（【Phase3 省察しつづける】）。それは、「行ったり来たり」「ぐるぐると」しながら、「何度も」「ゆっくりと」時間をかけて行う内的作業である。途中、【わかった！】と、スッキリ感を伴って納得する瞬間も得ながらも省察はつづき、わかったと「言い切れない」、「移ろい」終わりのないプロセスであることを予感させた。

【不確かな世界で】感じる“心もとなさ”，それを感じる「私」は【Phase1 在っている】のだという相互承認の感覚の上で、心が【Phase2 動かされ/動こうとし】、あれこれと終わりなく【Phase3 省察しつづける】。Phase1 から Phase3 の動きは循環的に継続し、そうしたありのままに、心もとなさのままにそれを抱え、「私」であろうとする総体的な態度が見いだされた（【Phase4 在ろうとする】）。

こうした Phase1 から Phase4 の構造は、参加者「私たち」の横のつながりにおいて、誰の中にもある“心もとなさ”が地続きに自分事として分かち合われ、安心、安全であたたかな関係の器にその揺らぎが抱えられ、自ずと動きが湧きおこることによって支えられていた。そして、身体ごとまるごとの「私」の存在と心の自由が関係の場に保障され、「私」の中に動きが湧きあがり、それを身に響かせて体感し、反芻し、私らしく体現するというように、この動きを貫くのはまるごとの「私」の身体性であると考えられる。すなわち、「語り合い」の参加者の体験の構造とは、「私たち」の関係性の横軸と、まるごとの「私」の身体性という縦軸によって支えられていると捉えられる。

一方、こうした循環的な動きを阻むものとして、【不確かな世界で】あることや、「ざわつき」「焦り」「圧倒される」といった形で心が【動かされる】ことが不安を惹起し、それを抱えきれず、防衛的に「ごまかす」「逃れる」「線引きする」など、心を【停止する】ことに至る場合もあることがうかがえた。また、【わかった！】という納得にそのまま留まって【停止する】場合もあった。しかし、参加者は、【停止する】に留まりつづけるのではなく、【停止する】自分を感じた後に、循環的な動きに再び舞い戻っていた。【在っている】は、“心もとなさ”を抱えきれずに一時的に留まるありようをも承認する機能を持ち、それが循環的な動きに舞い戻ることを支えていたと考えられる。“心もとなさ”と向き合うことは心理的な負荷が大きく、心の健康的な機能として、それを阻む動きが生じることは自然である。また、“心もとなさ”は言葉にしがたく、その省察には心的エネルギーとゆったりとした時間を要する。なかなか心が動き出さなくても、いったんは【わかった！】とすっきりとしたカタルシスに立ち止まっても、思わ

ず「線引きして」心の安定をはかろうとしても、「語り合い」の場ではそれぞれのペースとして保障されていた。その保障によって生じた時間的、空間的スペースの中で、参加者は【停止する】自分に自ずと気づき、再び心が動き出すことにつながっていると考えられた。また、【在ろうとする】という自己探究の志向性を参加者が備えていることも、【停止する】状態から再び心を動かしていく原動力となると考えられた。今回の参加者は、類似した被教育経験をもち共通の先達のイメージを内在化していたことや関連書籍に目を通したことから、自己探究の志向性はあらかじめある程度共有されており、【在ろうとする】志向性が高く、そうした姿が相互的に刺激を与えた。また、他の参加者に対する「先生」という呼称に示唆されるように、キャリアの長い参加者から短い参加者への垂直的な動きとして、その価値が教育的に伝達、伝播されていた。そして、「語り合い」後に個々でメタ観察を行うことが、【在ろうとする】志向性を強め、省察を活性化させると考えられた。

以上のように、“心もとなさ”を出発点とした「語り合い」は、心理職の自己探究を促進する取り組みとして実践的な意義があることが示唆された。自己探究の循環的な動きを創出するための鍵は【在っている】と【在ろうとする】の2つの相にあると考えられた。【在っている】の相によって、“心もとなさ”やそれをもつ「私」があることが保障され、それぞれのペースで心を動かすこと（時に動かさないこと）が支えられる。“心もとなさ”という根源的なテーマに焦点化する本実践において、【在っている】という保障の感覚はきわめて重要である。同時に、誰にでも内在する“心もとなさ”というテーマは、【在っている】という相互承認に自ずとつながっていく力を備えているとも考えられる。参加者は相互的に承認しあうが、あくまで志向するのは自己探究であり、心もたないままに「私」で【在ろうとする】志向性を参加者が備えていることが、互いのモチベーションを触発し、循環的な心の動きを引き起こすと考えられる。

【在っている】から【在ろうとする】への影響関係は、前者が後者を支持する関係にあり、その人それぞれのありようで在っていることと保障されることが、「私の臨床」を探究しその人らしく在ろうとする動きを促進する。逆に、その人らしく体現することに“心もとなくなく”明確な価値を置く【在ろうとする】から、多様な心のありようや多様な価値を認める【在っている】への影響関係は、相補的なバランスにおいて成立する緊張をはらんだ関係として捉えられる。つまり、その人らしく【在ろうとする】ことの価値が過度に強調され押し付けられてしまうことは、多様な価値や存在を相互承認し、時に心が動かず【停止する】ことも含めて受けとめていく【在っている】という懐深いありようを妨げることにつながりうる。逆に、【在ろうとする】ことに場が一定の価値をおくことができず、志向性が不明瞭になれば、場を貫く価値観が混沌とし、【在っている】という抱える機能が減弱しうる。

今回の試行は、【在ろうとする】ことの価値がほどよく共有され、自己探究に高い意欲をもつ研究者グループによって実施された。今後、本実践を心理職養成の方法として洗練させていくためには、より実践の適用範囲を広げて検討を重ねる必要がある。【在ろうとする】という明確な価値の共有と、【在っている】という水平な関係性による多様な価値の相互承認の雰囲気醸成とのバランスをいかに図っていくかという点を、その検討の焦点のひとつとする必要があるだろう。

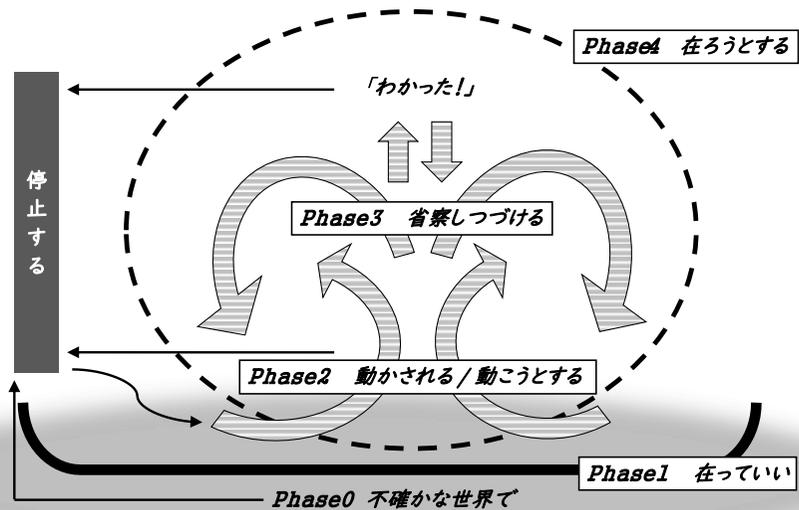


図1 「語り合い」における参加者の体験の構造

表1 「語り合い」の体験 カテゴリ一覧

カテゴリ	カテゴリ定義	サブカテゴリ	サブカテゴリ定義	ラベル
Phase1 在っていい	心もとなさは在っていい、「私」は存在していいと支えられる感覚			「信仰」する、居る(すなおに、つづける)、抱える、安心を感じる、器になる、裏づけられる、扱われる、心強く感じられる、許容される、原動力となる、肯定されたように感じる、支えられる、大切と思う、叱咤激励してくれる、包み込む(すべてを)、見守られる、受けとめられる(どっしりと)、励まされる、場となる、場を共にする、よりどころとする(自分の)、見放されないと感じる、保障する
Phase2 動かされる/動かこうとする	中動的に心が自ずと(おのずと)動かされる、または、能動的に自ら(みずから)心を動かそうとする、いずれか、またいずれも。	動かこうとする	能動的にみずから心を動かそうとする	手応えを求める(なんとか)、味わう、表出する(安心して)、疑う、耳をすませる、ことばにする(自分の)、吐露する(私にとっての)、探る、想像する、捉えようとする(精緻に、なんとか)、力をかける、引き受ける
		動かされる	中動的に心がおのずと動かされる	想起する/される、集る、圧倒される、ことが出ない、たじろく、自己嫌悪をおぼえる(ざらりと)、思い知らされる、ざわつく、しどろもどろになる、つかみかねる、感じる(改めて、今一度、必要を、つくづく、より、強く、素直に、はっきりと、ミクロに、リアルタイムに、実感)、気づく/気づかされる(改めて、内側から、自分に、再)、あらわになる、考えさせられる、ところが動く/動かされる、ことが湧きおこる(よどみなく)、省察を促される、自分に向かう/向かわせられる(ツツコミ、特大ブーメラン、精緻な)、喚起される、活性化する(私の内側)、触発される、賦活される、湧きおこる(急激に)、問う/問われる、揺さぶられる(精緻に、根幹を、大きく、今まさに)、わくわくふくらむ、響く(ずっしりと)、刺激し合う、語りたくなる、感情が渦巻く
Phase3 省察しつづける	終わることなく、対話的に、揺らぎながら、問いつづけ考えつづける			抗いつづける、言い切れない、行ったり来たりしながら省察する、移ろう、思いめぐらせる(ぐるぐる)、考えつづける(正解のないことについて、深いところまで)、繰り返し対話する(内在化)、共存している、問いつづける、留まりつづける、捉えつづける、解きつづける、試行錯誤する、省察を重ねる、咀嚼する(何度も)、反響しつづける(何度も)、わかってくる(おぼろげに)、内的作業しつづける(ゆっくりと)、わかりたいと思いつづける、留まる
「わかった!」	納得感、スッキリ感を伴って確かに思い至る			明らかになる、わかる!、納得する、思い至る、スッキリする、確かに感じる、手応えが感じられる、実感する、しっくりする(無性に)、ひととかれる、認識する
停止する	心を動かすことを止める			安住する、内輪の感じがする、確定する、囲いをつくる、根引きする(スパット)、形ばかりのしぐさになり果てる、かのように認識する、ごまかす、こぼれる、口実にする、気安くなる、自己卑下する、こぼれる、わかった気になる(欲定型、大嘘肥)、拙速に言語化する、逃れる(思わず)、自動的に想定する、蓋をする、防御する、忙殺される
Phase4 在ろうとする	心もとないままに在ろうとする、「私」で在ろうとする			会得する、こうありたいと願う(もっ)、体現する(そのまま)、体現を目指す、現前する、声をあげる、私の存在を感じる(強固として)、対話を求める、実践する

註

1 駒沢女子大学

2,3 学習院大学大学院

4 杏林大学

5 “心もとなさ”とは、「物事の基礎，システム，あるいは人の判断，感情などが動揺し，迷い，葛藤する事態」を指す「ゆらぎ」（尾崎，1999，pp.18-19）よりも射程は狭く心理的な状態そのものを示す概念である。また，「人が事実と理由を性急に追い求めることなく，中途半端な真実，不確実性，神秘，疑念に耐える能力」である「ネガティブ・ケイパビリティ」（Mawson, 2018/2023, p.42）と異なり，個人の属性的な「能力」でなく主観的・間主観的な状態そのものを指す概念である。

付記

本論文は，第44回心理臨床学会自主シンポジウム「“心もとなさ”からはじまる心理臨床—知的障害のある人への心理療法 その5(総括)—」（2025年10月5日開催）の発表を基にしている。

引用文献

- 遠藤利彦(2015)．“contingency”の視座からみる自己の萌芽と発達——発達心理学の立場から．チャイルドヘルス，18(4)，260-261．
- Fromm, E.(1976/1977)．生きるということ．佐野哲郎（訳）．紀伊國屋書店．
- 石倉 篤・中田行重(2021)．Tグループにおける「自己探求」が進む際の要素．関西大学心理臨床センター紀要，12，25-35．
- 河合隼雄(2000)．人の心はどこまでわかるか．講談社．
- 神田橋條治・滝口俊子(2003)．不確かさの中を 私の心理療法を求めて．創元社．
- 國分功一郎・千葉雅也(2021)．言語が消滅する前に．幻冬舎．
- 鯨岡 峻(2005)．エピソード記述入門——実践と質的研究のために．東京大学出版会．
- 熊倉伸宏（2002）．追補版 面接法．新興医学出版社．
- 松本拓真(2025)．“心もとなさ”の生き残り方．滝川一廣（監）中島由宇・櫻井未央（編）“心もとなさ”からはじまる心理臨床．金剛出版，pp.54-64．
- Mawson, C. (Ed) (2018/2023). W. R. ビオンの三論文．福本修（訳）（2023）．岩崎学術出版社．
- 三井さよ(2023)．知的障害・自閉の人たちと「かかわり」の社会学——多摩とたこの木クラブを研究する．生活書院．
- 本山智敬・永野浩二・村山正治(編)(2023)．パーソンセンタード・アプローチとオープンダイアログ——対話・つながり・共に生きる．遠見書房．
- 永野浩二・河崎俊博・益田啓裕・荒木浩子・宮川裕基(2022)．心理臨床家の Personal Development からみたエンカウンター・グループとフォーカシング体験の意義．追手門学院大学地域支援心理研究センター附属心の相談室紀要，19，28-42．
- 中島由宇・櫻井未央(編)(2025)．“心もとなさ”からはじまる心理臨床．金剛出版．

- 成田善弘(2007). 新訂増補 精神療法の第一歩. 金剛出版.
- 西平 直(2017). ケアの根源を求めて. 西平直・中村吉晴(編). 晃洋書房.
- 大倉得史(2002). ある対照的な 2 人の青年の独特なありようについて. 質的心理学研究, 1, 88-106.
- 大倉得史(2011). 「語り合い」のアイデンティティ心理学. 京都大学学術出版会.
- 尾崎 新(編)(1999). 「ゆらぐ」ことのできる力——ゆらぎと社会福祉実践. 誠信書房.
- サトウタツヤ・渡邊芳之(2011). 徹底的警句主義——開かれた随伴性の中で. 行動分析学研究, 26(1), 55-58.
- 白井祐浩(2022). セラピストの多様性モデルとセラピスト・センタード・トレーニング——個別要因を含めた心理療法の捉え方. 志學館大学人間関係学部研究紀要, 43, 33-58.
- 菅沼真樹(2025). 心理臨床における「あなた」と「わたし」——クライアントと向き合うとき, 心理職は「わたし」であり得るか. 滝川一廣(監) 中島由宇・櫻井未央(編) “心もとなさ”からはじまる心理臨床. 金剛出版, pp.155-167.
- 橋本洋子(2011). NICU とこころのケア——家族のこころによりそって(第2版). メディカ出版.
- 依田尚也(2024). ある心理専門職における学派選択の内実——ユング派を選択した A さんのライフヒストリーから. 質的心理学研究, 23(Special), S62-S68.